

貧乏なる婆さんがこの立像を人並に建て以てその名を後に遺さんが爲めに一生勞苦したと云ひ得る。一宗の本山に献金せしが爲めに貧困なる世活を續ける心地も、子孫の爲めに美田を買ふ親心も同一であると思ふ時嘲笑的評言に耳を傾けるよりも寧ろ堅忍不拔の精神の尊さに頭が下るのである。次に白紗を纏える新教徒たる二人の美人の裸像がある。エロ研究者にとつて典型とすべき柔軟性と威嚴とを表象してゐる。次もまた兩手を天に向つて舉げてゐる肉體美をもつ

亡者である。その他或は永久の眼を表象する婦人或は手を取りあへる二人の女性、或は幼兒を膝に抱ける婦人或は墓石の石段に身を凭せて居る婦人或は商業界に正道をもつて進む通商の神の車輪の下に不正の凶才を押し倒せるもの或は十字架を護れる二人の天使の裸像或は菊花の咲き群れるうちに肉體美を示す若き女性と水死を表はす女性の全裸像或は自動車の爲めに犠牲となつた若き眞裸の女性が同じく裸形の愛人の爲めに抱かれ最後の接吻をなせる風俗壞亂的なも

のなど舉げ來れば殆ど際限がない程である。人世悲哀の極致が何故に斯くも耽美主義の表現と一致すや極東人には不可解なエロ的世界を墓域の立像に見出して驚くのである。最後に愛國者たるマチニ (Mazzini) の墓に訪でて彼の偉業を忍ぶと既に墓域に半日を過してゐたのである。陰鬱なる可き墓地にあつて得た陽氣なる印象は永久に忘る可からざるものである。

新著紹介

○北安曇郡郷土誌稿 第一 口碑傳説篇 第一冊

信濃教育會北安曇部會編 四六版一九八頁

郷土研究社發行 定價八〇錢

北安曇郡誌刊行後、第二期の郷土研究が企てられ其の第一編として公にされたものが本書である。口碑傳説の數二百六十一種を山の話、池、淵、泉の話、石、地藏、石塔等の話、地名の由來、山人の生活、巨人傳説其他、社と寺の話等等的の十四の項目に分類して載録してゐる。傳説口碑から民俗學的な郷土誌を編むことは人文地理學上の一つの研究方面である。之は第一冊で數冊に上るといふことであるから此の方面の材料として學問上に重要であるべきと同時に讀み本として興味

のあるのは勿論である。(N)

○臺灣地質寫真集

第一集 紙幅二四釐×三一釐

寫真一四種×一九種 臺灣地學談話會編 臺北御成町一

丁目コトヒラ製作所發行 預約價十二圓

臺灣の地質はこの數年前から多くの臺灣在住の地質家によつて新觀察と新研究とが行はれて居、從來の定説を破る様な結果を持來たした點が少くない。臺灣には地質現象の内地に見られぬ様なものもあつて我國内の地質現象の好き實例を供すものが少くない。臺灣地學談話會はこゝに見る所があつて會員の撮影した地質學的寫真を玻璃版にし、附するに解説を以てし、伯林ボルトレーゲル發行K・アンドレー博士編纂の地質特有景觀集(Geologische Charakterbilder)の如きものを豫約で發行されることになつたのである。而して第一集は六拾版より成り、毎月五版つゞ配本され一箇年を以て第一集を完了する豫定である。六月から公にされ既に第二回が出た。既出の副版は豚背構造、風蝕作用、背斜、向斜、逆斷層、單斜構造、浸蝕、惡地地形、海蝕正斷層を示した臺南臺北の兩州に亘つたものである。玻璃版は必ずしも上出来とは云へないが地質現象を充分に知るに足るもので、獨り臺灣内の中等學校ばかりでなく廣く内地の中等以上の學校に於ける教材として推奨するに足るべきものである。(中村)

○滿洲地誌研究

田中秀作著 昭和五年七月

古今書院發行 定價三圓八十錢

大正六年から滿五ヶ年滿鐵の教育研究所に於て遼東滿蒙の地を跋渉し歸つて彦根高商で地理學を講ずることとなり、昨年海外留學の命を了へて歸朝された篤學の士、學友田中秀作君の近著である、滿洲の地誌を編するに最適任の人であることは、其展歴の示めす通である、予も亦年來之を嚮慕した甲斐があつて今度こゝに菊版四百頁の研究本が上梓されたことは何といつても近頃の快聞である、本書は序説に滿洲地理研究についての主要文献をのべ、滿蒙の地名起源及その發達の歴史を概観し、第二編總説に入つては、位置、境域、地形、地質、氣候、住民を論じ、産業篇交通篇政治を誌したるのち第三編各論として半島區、遼東山地、遼河、遼西、松花江上流、北東山地、松花江及嫩江流域、遼河、興安以西、北部山地の十地理區について、都邑名勝の概説がしてある。内容の多いのに比して紙数が少いから、之を一讀した感は、簡潔得要といふ四字につきる。筆者の考ふる所によると、世間には滿洲を何故に滿蒙といふかを知らぬ人が多い。これは滿洲の發達が近世の歴史であつて、蒙古王領の地が遼西から吉林に及んでゐたことを理解せぬ故であつて、滿洲といへば興安嶺から岡門、鴨綠までの間だと早合點をする結果である、元來支那人の土地でなくて、古くから東胡民族の占據地で遼、金高句麗の地であり、近世は多く蒙古領になつてゐたのを三百年前に遼東山地興京から崛起した滿洲が、こゝを統一し、支那や蒙古の支配者となつたからで、滿洲は實は狭い土地であり清朝になつても久しく封禁の地であり漢人を居住せしめず

朝鮮との國境帯の狭きも空地にしてあつた所である。それがいつのまにか漢人の居住地に變移した所に我等は注意すべき多くの地理的原因を求めねばならぬ、本書もさうした史實を林業篇や或は地方誌の所々に洩らされはるが、不幸にして序説の部に於てその説明が十分でない恨がありはしないかと思ふ、産業の分布と地味氣候との關係とその開發と鐵道との關係についても更らに詳密な解説を要求すると同時に、滿洲に於ける日本人の權益を明確に記述してほしかつたと思ふしかしそれは望外の欲である。我等は本書を讀むことによつて滿洲の現狀をしり特に産業の部に於て目新らしい智識を得たこと交通の章に於て段々増加してゆく各鐵道とその延長の著しきことを學び、地方誌に於て多くの都邑とその都邑發達の意義を理解し得たことを感謝せねばならぬと思ふ。近頃の地誌類の中で、よく纏まつた勞作として、敢て之を讀者に推薦したい。(藤川)

○内藤博士史學論叢

昭和五年六月二十日 京都弘文堂發行
正價八圓五十錢

内藤博士の還曆祝賀の東洋史論叢が世に出たのは既に五年以前のことであつたが、同書に洩れた知友の人相謀つて、其後第二集の發刊を企て、それが愈本書となつた、本書は史學論叢とはいふものゝ歴史地理學に關するものが多い、即ち公孫氏の帶方郡と曹魏の樂浪帶方二郡(池内宏)の如きは漢の四郡以後朝鮮半島の變化をのべたもので、我國の上古史に最も關係のふかい歴史地理であり、中世に於ける淀川河目の發達

(魚登惣五郎)は大物浦(尼ヶ崎)の發達をのべて今の大版に先行した史料をあげ、支那印花布源流考資料(新村出)は所謂日本の忍ぶもぢすりと云ふ技術と類似の花布班布の源流が古く苗族にもあり、近世安南暹羅から更紗といふものが舶來したことをのべ、朝鮮支那間の航路及其推移に就て(内藤尙輔)は朝鮮と支那山東及吳(寧波)との航海路を詳密に考證した勞作であり河源編(藤田元春)は黃河河源説とその推移を明にし、世界圖屏風考(牧野信之助)は我國に存する古い世界圖の製作時代とその源流とを考證したもので、地圖學史上の注目すべき收獲である、二十三篇の論文中六篇までも歴史地理學上の論文であることは珍らしいと思ふ、勿論その他多くの大家の名篇もあることであるが地理に關係がないからこれを省略するけれども、一々讀んで面白い考へさせらるゝ點の多い論叢である。猶又渡邊薫太郎氏の琉球進貢表、今西博士の朱蒙傳説又は西田博士の日本上代のトリーテミズムの痕跡のごときも強て歴史地理學上の問題であると思つて見られぬことはない、何はともあれかうした史學論叢の中に、地理學的研究が段々地步を極めてゆくことに尠からぬ興味をひく一人として、予は讀者に本書の出現したことを報告推薦したいのである(藤田)

○天然記念物調査報告

昭和五年四月二十七日發行 文部省

本報告は故佐藤傳藏氏の調査にかゝるものを骨子として富田達氏執筆の分一篇を加へ、佐藤源郎氏の編纂に成るもので

ある。收むる記念物九篇あり、一、瀬戸鉛山村湯崎半島(和歌山縣)二、瀨峽(紀州)三、那智ノ瀧(和歌山縣)四、曾爾村安山岩柱狀節理(奈良縣)五、濱坂海岸(兵庫縣)六、青龍洞玄武岩柱狀節理(兵庫縣)須佐灣(山口縣)八、名島橋石(福岡縣)九、十和田湖(秋田縣)

第一第八篇は佐藤氏の遺稿を嗣子佐藤源郎氏が山島吉五郎氏、栗田鼎造氏、岡本勇治氏等の援助の下に纏められたるものであつて、亡父職責の一部を果し、其の遺靈を慰むるを得ば望外の喜びとするに記されて居る。瀨峽、那智ノ瀧は既に有名であるが、湯崎半島は紀州著名なる温泉の所在地で、附近には泥火山跡、砂岩脈、乾裂、偽層等地質現象に珍らしきものがあり、曾爾村は大和至生火山群中にあつて、屏風岩赤岩の柱狀節理は特に珍奇である。濱坂海岸ではその東北に奇勝があつて、通天洞門、三尾大島の粗面岩柱狀節理、釣鐘洞窟等の記事を詳細にされ、青龍洞は但馬玄武洞の東に接し須佐灣は沈降灣として地形的に特殊なる形状を有し、北方の高山(五三二、八米)は標式的餅盤であるといふ。名島の橋石は福岡縣香椎の西南黒崎附近にある珪化木(筑豊地方で松岩といふ)である。第九篇十和田湖は富田氏の記事に成るもの詳細に地質の説明があつて得難い文獻である。四頁の十和田湖山地断面圖は古今書院發行の「地理教材としての地形圖」第一輯に更に精細なるものが載つてをる。

因に正誤表が附加されて一二誤植を正されて居る。但し、目次第一頁名島橋石を靜岡縣とせる誤植は正されて居ないが

誤り易い誤植の一つである。(上治)

雜 報

○朝鮮慶北仁同に落下した隕石

去る三月十七日午

後四時頃漆谷郡仁同面玉溪洞郷安谷の小山の中腹に隕石が落下した。落下の模様を述べると突然ダイナマイトの爆音に似た音あり、やゝあつて再び火花を揚げた時の様な爆音があつた。其の後飛行機の飛ぶ様な音聞え、次でグーグーと聞えた。なほ電線の唸りに似た異様の音が三、四分間續いて東方から近づいて來る様に聞えた。其の時地上四、五米の所を落下しつつある何物かを認め、ガツと音をたて、地上に落ちた。これは落下地から四、五十米離れた處で堤防工事中の人夫達が見聞したものであつた。數分の後區長の息子が現場に行つて見た所、五分許り露出して地中に陥つた微熱もない石を發見した。隕石落下中の音響の聞えたのは落下地から二十軒も超えた所もあるが南西から落ちた爲めに音響傳播區域は南西に廣い。隕石の大きさは手掌二つ合せた位で重量一三三五グラム(三五六匁)、色は黒く所々濃淡あり、又黄色の斑點もあり又面には指先にて柔かき餅を押しした様な凹所が所々にあり。標本には缺損した部分があるが之は部落民が石にぶつけて刺ぎ取つたのである。缺損した所は灰白色で所々銀色の斑點がある。(氣象要覽三六八號に據る)